

“MY TOWN” うおっちゃん

歩キ目デス & 足ラテス

Vol.58

ニュー・シネマ・パラダイス 伊方編

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰
ヘリテージマネージャー



湊座前景

イタリア映画「ニュー・シネマ・パラダイス」が公開されたのが1989年。日本はその年、昭和が終わる平成の時代になった。思えば平成も24年、あれから既に干支で二周りも過ぎ、大正期が15年間だった事を思えば、かれこれの年数という事になる。

さて、昨年の11月26日、伊方町にある町見郷土館の高嶋賢二氏から第一報の携帯電話が鳴る。「いよいよ湊座が解体されることになりました。ついては、緊急に記録保存をしようと思ってますが……」聞けば、それは12月1日から。もう一週間も無い。急ぎ知友人に連絡を取り、何とか29日にボランティア実測調査とあいなった。

その湊座は、伊方町の中心部湊浦にあり、長らく地元の映画館として親しまれたものの、やがて映画斜陽の中変遷があり、近年は建物が縫製工場に利用されていた。詳細はまだ調査中だが、昭和43年頃には映画館としての役割を終えていたらしい。全国どこもがそうであるように、同33年をピークにその後各地で上映館が減少し、同40年代頃から急速に普及するテレビにその座を追われ、町から馴染みの映画館が消えていった。最盛期には全国で年間1億人余の観客数があり、赤ちゃんまで入れて一人当たり、毎月必ず一度は映画に行っていたことになり、驚くばかり。平成8年にはそれが約10分の1となつて底を打ち、現在はシネコンなどの影響もあり年間1、6億人ほどで回復傾向とのこと。

ところで、今回の調査では得がたいモノが見つかった。建物の歴史を証明する棟札である。こうした場合には、屋根裏調査は必須要件。これが有るか無いかで歴史価値の裏付けが左右される、言わばタイムカプセル。木造トラスと呼ばれる



実測班メンバー、
左から二宮、高嶋、浅井の各氏



トラスに貼りつけてあった棟札

洋風架構に、それはしつかり打ち付けられていた。取り外しは、若い二宮一平氏に上がつてもらい、相手を打ち、それからおもむろに。彼は、昨春東京から故郷日土に戻つて来た一級建築設計士。その、あの建築家松村正恒が設計した日土小のOB。こうして地域事の文化活動に加わる彼を見れば、松村先生が健在なればさぞや目を細められたに違いない。

その棟札によれば、昭和二十九年七月十五日上棟、大工棟梁は宇都宮勇、他に大工6名と左官1名。地元の委員長が橋本六美、各委員が20余名、加えて工事監

督や区長の名も。まさにこの板一枚に書かれた36名から、地域の熱い思い入れが伝わってくる。1954年当時と言えば、その前年に朝鮮動乱が終結し戦後復興が形となりつつあって、ようやく世の中が落ち着き始めた頃。やつと地方でも、庶民が大衆娯楽としての映画を享受できる平和が実感出来た世の中ではなかったか。これもご縁なのか、かくいう筆者の生年でもある。これからの数年が映画の全盛期ということになる。



映写機二台

な映写機が二台、鎮座まし、まさにニュー・シネマ・パラダイスの世界を彷彿とさせる。数日後に壊される運命の間を記録撮影しながら、私の頭の中では、あのエンニオ・モリコーネの名曲が流れていて、トト少年の甲高い声と映写技師のだった。

今回の緊急実測調査及び歴史資料保存活動は、日ごろの町見郷土館における「佐田岬みつけ隊」活動に負うところ大で、件の映写機もそっくり残す事が出来、ニューズ映画フィルムも約20本が発見回収された。我々は図面及び写真記録で協力し、何事かのサポートが出来たようである。思うに、文化財指定されているものでさえ、その実際の予算配分は充分とは言えず、遺し伝えることの難しさが常につきまとう中、こうしたケースはある種の人の縁による奇跡だったりもする。ましてや戦後の建物。伊方町にはそうしたボランティアの文化活動を厭わない住民組織があるという強味は、通常では有り得ないまるで映画の世界。伊方のニュー・シネマ・パラダイスの所以である。



レトロな天井の様子



映写室の入り口



見つかったポスター

アルフレードの野太い声がかたましていた。まるで、かつて嗅いだ酸っぱいフィルムの匂いと共に、そこから彼らが現れ、もするよう、しばらく空想の世界にひたつた